

NICU・GCUに入院した児の母親に対する母乳育児の初回説明が 母親の母乳育児行動に与える効果

キーワード 母乳育児

E棟4階 ○當麻有佐 宝来恵子

I. はじめに

近年、出生率が下がっているが、早産児、低出生体重児は増加傾向にある。早産児や低出生体重児は、NICUやGCUに入院し、母子分離が余儀なくされる。NICUやGCUでは児が入院することによって母子分離状態となり、母親は正常新生児とは異なった母親役割獲得への過程をたどる¹⁾。その過程でも母乳育児は、母親としての自己形成²⁾や抑うつ、育児困難感に影響を与えている³⁾ことがわかっている。また、早産児の栄養には母乳が最適⁴⁾であり、早産した母親のプロラクチンの基礎値は正常産の場合より低値だが、搾乳により上昇がみられること、出産週数と母乳分泌量には関係がないことがわかっている。これらのことから、NICU・GCUに入院している児の母親が、母乳育児を開始する際の初めの声掛けは母親にとって母乳育児を開始する導入となり、NICU・GCUで勤務する看護師にとって母乳育児支援は重要なケアの1つであると考えられる。

母乳育児を始めるときの母親への説明や母乳育児に対する理解度が母乳育児の実施率や開始時期にどのような影響を及ぼすのかについての研究は見当たらない。そこで、NICU・GCUに入院した児の母親に対し、病棟で児の入院時に母親に説明している母乳育児パンフレットを使用し、母乳育児の初回説明が母親の母乳育児行動に与えている効果を明らかにすることで、今後の母乳育児支援方法を検討した。

II. 目的

母乳育児開始時の母親への説明がその後の母乳育児行動にどのように影響するかを明らかにし、具体的な支援方法を検討する。

III. 方法

(1) 研究デザイン：アンケートを用いた量的研究

(2) 対象：A病院NICU・GCUに入院している児の母親

(3) 研究期間：令和1年9月26日～R1年12月31日

(4) リクルート方法：A病院のNICU・GCUに入院している児の母親で母乳育児をしているまたはしていたもの。出産後7～10日はマタニティブルーが予測され産後2週間以内に終息することから、産後2週間以降にアンケート配布とした。但し、産後10～14日に実施するエジンバラ産後うつ病質問票(EPDS)にかかる者、また精神的なフォローが必要である者を除く。

(5) 倫理的配慮

研究参加への依頼は、口頭での研究の趣旨を説明し、研究協力の同意を得、質問用紙の配布の許可を得た。無回答でも母、児両方に不利益が生じないことを記載の文書をアンケート用紙と一緒に説明し、手渡した。本研究は奈良県立医科大学医の倫理委員会(承認番号：2402)に審査を申請し承認を得た。

IV. 結果

質問紙は 24 名に配布し、20 名の回答(回収率 83%)があった。そのうち研究者作成の質問項目に欠損のない 17 名を分析の対象とした(有効回答率：70.0%)。

表 1 属性 (n=17)

1. 対象者の属性

項目	人	(%)	
年齢	25～29歳	2	11.7
	30～34歳	8	47
	35～39歳	3	17.6
	40～45歳	4	23.5
初経別	初産	9	52.9
	経産	8	47
週数	24～27週	1	5.8
	28～33週	4	23.5
	34～36週	5	29.4
	37週～	7	41.1
出生体重	1000～1500 g	1	5.8
	1500～2000 g	1	5.8
	2000～2500 g	2	11.7
	2500～3000 g	7	41.1
	3000～3500 g	3	17.6
	3500g以上	3	17.6

母親の属性(表 1)は 25～45 歳の間で、30～34 歳が最も多く 8 名(47%)であった。初産婦 9 名(52.9%)と経産婦 8 名(48%)でほぼ同数であった。週数は 37 週以降が 7 名(41.1%)で最も多く、出生体重は 2500～3000 g で 7 名(41.1%)であった。

2. 母乳育児パンフレットの配布時期について

母乳育児パンフレット(以下パンフレットと記載)の受け取り時期について、「入院当日」が 4 名(24%)、「3 日目以内」9 名(53%)、「4 日目以降」2 名(12%)、「パンフレットを受け取ったかどうか覚えていない」が 2 名(12%)であった。しかし、実際のパンフレット受け取り時期に対し、パンフレットの受け取り希望時期は、「入院当日」が 7 名(41%)、「3 日

目以内」が 8 名(47%)、「4 日目以降」は 0 名となっている。「その他」のコメントとしては「いつでもよい」と記載した者が 2 名(12%)であった。また、パンフレットを「受け取った」と答えている 17 名は、「受取時に説明を受けた」と答えており、受け取った全員がパンフレット内容を自己でも読んでいることがわかった。そのうち 14 名が「内容を覚えている」と答えている。そして、「パンフレットを読んだが内容を覚えていない者」(3 名)は、「児のことで頭がいっぱいだった」と回答していた。

パンフレットを受け取った時のことについて、「パンフレットの内容をもっと説明してほしいかった」2 名、「パンフレットの概要だけ説明してほしいかった」1 名、「説明時の態度が温かく感じた」10 名、その他「適切であった」「覚えていない」2 名であった。

そして、パンフレットを受け取った 17 名全員がパンフレットによって母乳育児への意欲が湧いたと回答している。

3. 母乳育児パンフレットの説明内容について

パンフレットの説明を受けているときに詳しく聞きたかった内容として「児への効果」が初産婦、経産婦ともに最も多く 10 名(58.8%)であった。複数回答では、初産婦は「乳房トラブルがあった時のことについて」が一番多く、次いで「授乳(搾乳)時の服装」だった。経産婦は「搾乳の保存方法について」と「搾乳の頻度について」が複数回答で多い回答となっていた。

パンフレット内容で生かされたと感じている内容は「母乳育児開始時のおっぱいへの刺激の必要性について」5 名(29%)が多かった。複数回答の初産婦では「搾乳の頻度について」が最も多く、次いで「搾乳の保存方法について」と「母乳育児開始時のおっぱいへの刺激の必要性について」であった。経産婦では「搾乳の頻度について」と「児への効果」が最も多い回答となっていた。

4. 出産前後の母乳育児に対する思い

出産前の母乳育児への思いとして、「できればしたいと思った」と答えている者が8名(47%)で1番多く、2番目に「母乳育児をするかどうか決めていなかった」が4名(23%)で多かった。しかし、出産後は「やった方がいいと自分で思った」が7名(41%)で最も多い回答となっており、次いで「絶対したいと思った」「できればしたいと思った」がともに5名(29%)で多く、出産前後での気持ちの変化があることがわかった。

また、初経別に出産前の母乳育児への思いを見ると、初産婦が「できればしたいと思った」「決めていなかった」が3名ずつ(17%)で最も多いのに対し、経産婦は「できればしたいと思った」が5名(29%)で多くなっていた。

出産後は、「やった方がいいと自分で思った」が初産婦4名(23%)、経産婦3名(17%)ともに1番多かったが、2番目は初産婦では「できればしたいと思った」3名(17%)、経産婦では「絶対したいと思った」2名(11%)であり、違いが認められる結果となった。

V. 考察

1. 母乳育児の初回説明が母親の母乳育児行動に与える効果

NICUやGCUに入院する児は通常の出産後とは異なり、母子分離状態になる。母子分離は母親役割獲得過程に影響を与えており、母親の多くは、母親としてのアイデンティティの認知に、何らかの遅れを経験している²⁾。また、産後はマタニティブルーも起こりやすい時期であることや、低出生体重児を持つ母親の特徴として、出産時から出産したことへの自責の感や母子分離状態による喪失感や孤独感の体験、児の成長・発達への焦り、養育行動に対する不安があることから精神的にも負担を負う。^{1) 3) 5)}

しかし、母乳育児は母親役割の一部であり、母乳育児の成功は母親役割獲得に強い関

連がある^{6) 7)}。今回の研究で出産前後の母乳育児に対する思いについて、出産前は「できればしたい」が多かったが、出産後は「やったほうがいいと自分で思った」が多く回答されており、自責の念や児の成長に揺らぎを抱えながらも母乳育児には前向きである⁶⁾ことから、NICU・GCUに入院する児の母親に母乳育児の初回説明をすることは重要であることが言える。

そして、「母乳の児への効果の説明を詳しく聞きたい」と思っていることパンフレットによって母乳育児に対する意欲が湧いたと回答されていることから、児の入院後に母乳育児パンフレットを手にし、看護師からパンフレット内容の説明後に自己で読むことは母親の母乳育児行動に影響を与えていることが考えられる。

また、パンフレットの内容で生かされたと感じる内容について「母乳育児開始時のおっぱいへの刺激の必要性について」が選ばれている。パンフレットには産後6時間以内に乳房への刺激をすることの記載していることから、実際の入院当日にパンフレットを受け取った者は24%に対し、児の入院当日にパンフレットを受け取りたいとしている者は41%に増加したことが考えられる。そして、児の入院から3日目以内にパンフレットを受け取りたいと考えている者は、全体の88%であり、パンフレットは児の入院から3日目以内に渡すことが望ましいと考えられる。

2. 初産婦と経産婦の違いについて

パンフレットの説明を受けるときに、詳しく聞きたかった内容や生かされたことについて全体での回答は分散せず一致したが、複数回答になると初産婦と経産婦では詳しく聞きたかった内容や生かされたことについて違いがみられている。

初産婦では乳房トラブルのことや搾乳について方法、頻度、保存方法全般についてであり、経産婦では母乳育児開始時の刺激の必要

性や搾乳の頻度、母乳の効果など正常新生児では知りえなかった情報が中心となっていることから、初産婦と経産婦では母乳育児行動に影響を与える要因が異なっていることが考えられる。

VI. 結論

母乳育児開始時の母親への母乳育児パンフレットの内容の説明は、出産前の「母乳育児をできればしたい」という思いから、出産後は「やった方がいい」という母親の母乳育児に対する思いや、「母乳育児に対する意欲が湧いた」と回答していることから、母親の母乳育児行動に影響を与えていることが考えられる。

パンフレットを用いた具体的な支援方法として、「パンフレットは入院より3日目以内に渡すこと」「母乳の児への効果があることを説明すること」が、効果的であることが今回の研究から示唆された。

〈引用文献〉

- 1) 安積陽子：早産児をもつ母親の親役割獲得過程に関する研究，日本助産学会誌 第16巻 第2号 p. 25-35, 2003.
- 2) 田中利枝：早産児を出産した母親が母乳育児を通して親役割獲得に向かう過程，日本助産学会誌 26巻 2号 p. 242-255, 2012.
- 3) 横田 妙子：低出生体重児をもつ母親の抑うつと育児困難感の推移と関連，香川大学看護学雑誌第18巻第1号 p. 25-34, 2014.
- 4) 水野克己，水野紀子著：母乳育児支援講座，改訂2版，南山堂，2017.

〈参考文献〉

- 5) 佐野千佳：新生児搬送により母子分離を経験した母親の気持ちの変化，日本看護学会論文集 急性期看護，p. 103-106, 2019
- 6) 田中利枝：早産児を出産した母親が母乳育児を通して母親としての自己を形成していく過程，母性衛生・第55巻2号 p. 405-

415, 2014.

- 7) 田中利枝：早産児を出産した母親の母乳育児をとおした思い，母性衛生・第55巻1号 p. 172-181, 2014.